

平成 27(2015) 年度 授業改善アンケート実施報告

<現状と課題>

- 基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて
梅川 健（基礎ゼミナール部会長、都市教養学部法学系 准教授）
- 情報リテラシー実践 I 授業改善アンケートの結果と FD の取組
永井 正洋（情報教育検討部会部会長、大学教育センター 教授）
- 実践英語教育 授業改善アンケート結果の検討とこれからの課題
辻 麻子（英語教育分科会座長、都市教養学部人文・社会系 教授）
- 未修言語の授業改善アンケートについて
佐々木 睦（未修言語科目部会長、都市教養学部人文・社会系 教授）
- 理系共通基礎科目の授業改善アンケート結果と FD の取組について
川原 裕之（理工学系 FD 委員会委員長、都市教養学部理工学系 教授）
- 教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて
小口 俊樹（教養・基盤科目群検討部会長、都市教養学部理工学系 准教授）

基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて

基礎ゼミナール部会長
都市教養学部法学系政治学コース准教授
梅川 健

【はじめに】

基礎ゼミナールは、新入生を対象とした演習形式の必修授業であり、能動的な学習姿勢を身につけ、調査・発表・討論のための基本的な技術を習得し、共同作業を通して豊かな人間関係を形成するために必要な力を身につけることを目的としている。1クラスの定員は22名と少数であることが特徴となっている。

本年度は1,660人の履修者に対して82クラスが開講された。以下では、学生を対象にして行われた「授業改善のためのアンケート」の結果の概要を報告する。

【調査対象と回収率】

学生用アンケートの調査対象者は、各ゼミナールの受講者である。82クラス中、71クラスでアンケートが実施され（実施率86.6%）、履修登録者1,660名中、1,309名から回答を得た（回答率78.9%）。昨年度の実績と比較すると、実施率は82.5%から上昇し、回答率は77.6%からわずかに上昇した。

【質問項目】

質問項目の問1～4は、全体に共通する項目であり、問8～10は基礎ゼミナールについての個別の質問項目である。まず、個別の質問項目について見ていきたい。

基礎ゼミナールの3つの個別質問項目（問8～10）は、2年前に質問項目を大幅に変更したところであり、今回も同様の質問内容でアンケートを実施した。

問8は、課題発見能力と問題解決能力の向上という授業目的に関するものである。問9は自己表現力の向上に関するものであり、問10は人間関係の構築に関するものである。いずれの質問も、基礎ゼミナールの目的と密接に関係している。

【アンケート結果】

(1) 共通事項

問1の回答の平均値は4.02と高い水準にある。基礎ゼミナールのシラバスが、受講者の授業選択と学習に役立っていることがわかる。問2の回答の平均値は4.06であり、受講者自身の理解度が高いことがわかる。この二つの項目については、どちらも、5段階中の「5」もしくは「4」と回答した割合が7割を越えており、学生にとって基礎ゼミナールの満足度が高いことがわかる。このような結果は、授業担当教員による努力の成果であると考えられる。

問3は、授業時間以外の学習時間を問うものであり、7割を越える学生が、一定の時間を基礎ゼミナールのための学習に時間を割いていることがわかる。学生の学習時間の傾向は、前回の調査からの変動はない。

問4は、授業で修得・向上した知識と能力を問うものである。ここで目を引くのは、「幅広い教養としての知識」だと回答した学生の割合が49.6%、「コミュニケーション能力」と回答した学生の割合が39.3%と非常に高い点である。「能動的学習姿勢」と回答した学生の割合は27.5%に留まるものの、これらの結果は、基礎ゼミナールの目的に沿ったものだと言えよう。

(2) 個別事項

個別質問項目のアンケート結果の平均値を見てみると、問8は4.15、問9は4.00、問10は3.99と、いずれも高い水準にあるといえる。一方、3つの質問項目の間では、若干の差が見られ、この傾向は前回、前々回から変わっていない。この3年間の調査で最も平均値が低いのは問10であるが、興味深いことに、5と回答した割合が高いのも問10である。

これらの結果からは、基礎ゼミナールの目的が達成されているものと考えられることができる。

【自由記述欄】

以上の質問はマークシート方式によるものであった。問5～7については、自由記述方式であり、その内容を概観する。

問5は、授業についての教員の工夫や良かった点を問うものである。学生の回答でもっとも目立つのは、グループワークへの満足感である。多くの学生が、グループワークによって、他の学生と考え、討論し、発表をまとめるという経験を、軽やかに記述している。また、レポートの書き方について、熱心な指導を受けたという記述も目立つ。これらの自由記述からは、授業担当教員の熱意が学生に伝わっていることがよくわかる。

問6は、授業改善の要望を聞いたものである。ここにもグループワークが登場する。目立つのは、グループを固定化するのではなく、適宜メンバーを入れ替えることでもっといろいろな学生と交流したい、というものである。他に、教室設備に対する要望もあり、インターネット接続の悪さを指摘するものも見受けられた。

問7は「自由な意見」を聞いたものである。ここでは、6月が猛暑であったことに関係し、エアコンに対する不満が散見された。先に挙げたインターネット接続や、教室の気温といった教育環境は、授業担当教員による周到的な授業準備を台無しにしかねない。改善が必要などころである。

【おわりに】

以上、学生を対象に行われたアンケートの結果を概観した。基礎ゼミナールに対する学生の満足度は高く、授業目的はおおむね達成できていると考えることができる。

今後の更なる授業改善のために、新旧の基礎ゼミナール担当者による情報の共有が重要であり、今後も「基礎ゼミナール懇談会」のような取組を継続していくことが重要だと考える。

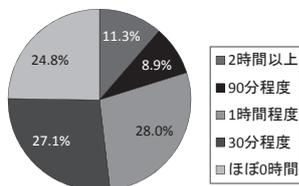
＜実施期間＞ 平成27年7月9日(木)～平成27年7月27日(月)
 ＜履修登録者数＞ 1,660人 ＜回答者数＞ 1,309人 ＜回収率＞ 78.9%
 ＜授業科目数＞ 82クラス ＜実施科目数＞ 71クラス ＜実施率＞ 86.6%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	4.02	0.99		37.8%	36.7%	17.9%	2.5%	5.0%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	4.06	0.86		33.4%	45.6%	16.4%	1.3%	3.4%
問8 この授業を通じて、問題発見と、その解決に向けた自発的な取り組み姿勢の重要性を認識した。	4.15	0.83		37.6%	43.3%	16.5%	1.2%	1.4%
問9 この授業を通じて、議論や発表などの自己表現能力を向上させることができた。	4.00	0.86		29.4%	47.6%	18.7%	1.6%	2.8%
問10 グループでの調査や討論を通じて、他所属の学生とも良好な人間関係を形成することができた。	3.99	1.05		37.7%	36.3%	17.0%	3.8%	5.2%

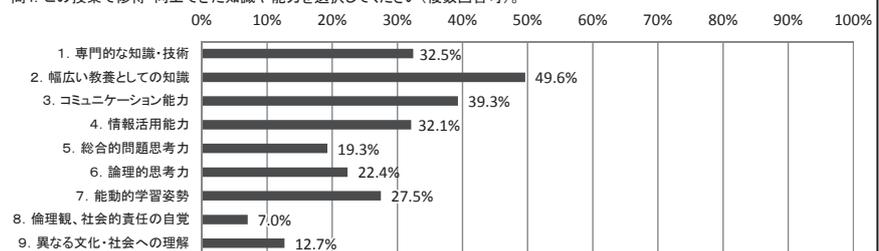
データ数=1,309

■5.そう思う ■4.ややそう思う ■3.どちらでもない ■2.あまりそう思わない ■1.そう思わない

問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。)



問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。



情報リテラシー実践 I 授業改善アンケートの結果と FD の取組

情報教育検討部会部会長
大学教育センター教授
永井 正洋

【はじめに】

情報リテラシー実践 I は、基礎的な情報活用の実践力を育成する科目として設置されている。近年、より専門性を高めた授業として情報リテラシー実践 I A (表計算ソフトを利用した統計処理)、情報リテラシー I B (表計算ソフトを利用した基礎的プログラミング) という科目も設定した。現在は、これら 3 科目のうち 1 科目を選択必修として、学部・系・コースが指定しているが、実際には I と I A だけの開講となっている。

本稿では、2015 年度の前期末に行った FD 委員会・基礎教育部会実施の情報リテラシー実践 I に関する授業改善アンケートの結果と、情報教育検討部会が行った授業評価アンケートの結果について報告する。また、本年度からは FD の新しい取組として e ラーニングを活用した情報リテラシー倫理テストも開始したので、それについてもふれた。

【授業評価の方法】

まず、授業改善アンケートの質問項目だが、共通項目が問 1～4、個別質問項目が問 8～10 となっている。個別質問項目については、情報教育検討部会にて設定される。

【2015 年度】

実施時期：2015 年 7 月 9 日～7 月 27 日

対象：首都大学東京 情リテ I 受講者

回収人数／履修登録者： 1,363 人／1,671 人 (81.6%)

方法：kibaco (37 クラス / 38 クラス)

【結果と考察】

問 1～10 は、FD 委員会・基礎教育部会が実施した授業改善アンケートの結果である。問 8 (満足度) からは、71.8% の学生が受講して満足と感じていることが分かる。また、問 9 (難易度) に関しては、現在の学習内容を 21.9% の学生が容易だと思うのに対して、44.1% の学生が難しいと思っており、例えば、情報リ

テラシー実践 I の学習内容をより専門的・応用的なものとする場合は、精査が必要なことを示唆している。次に、問 3 (授業外学習時間) からは、授業以外の学習時間について、30 分未満の学生が 69.7% いることが示されている。ここで前年度が 81.4% であったことを勘案すると、反転学習などの取組が着実に結実していることがうかがえるが、未だ本科目の抱える問題といえよう。最後に、問 4 (知識・能力獲得) を見ると、特に「専門的な知識・技術」、「情報活用能力」を修得・向上できたと回答していることが分かるが、現在、情報倫理の育成に関して要請の多いことを勘案すると、「8. 倫理観、社会的責任の自覚」の項目を今後、伸ばしていく必要があると考えられる (H26=10.8% → H27=8.7%)。

続いて、情報教育検討部会による授業評価アンケートの結果 (図 1) に関して報告する。これら 4 つの質問項目からは、学生の 74.5% が、情報リテラシーが身についたと回答するとともに、70.7% が意欲的・積極的に授業に取り組んでいることや、約 75.5% の学生が教員の説明を分かりやすいと思い、また、その対応に満足していることが分かる。

以上、まとめると、おおむね学生は意欲的に授業に取り組み、教員の説明や対応も評価するとともに、情報リテラシーが身についたと認識している。さらに、その結果、全般的に授業を受講して満足していたことが示されたといえる。このような傾向は、ここ 5 年以上続いており、情報リテラシー実践 I のカリキュラムが、継続かつ安定して学習者に評価及び支持されていると考えられる。

反面、課題となる側面としては、授業内容をどちらかというとなりに感じている学生が多くいるとともに、授業外での学習時間が不足していることがあげられる。特に学習時間が十分でない点に関しては、単位の実質化の観点からも問題となる。この 2 年間、主体的な学習を促すような e ラーニングを授業前の予習として位置づけ、反転授業を構成するなどして改善を目

指す取組を実践しているが、前述のように効果が見られているので続けたい。

【情報倫理教育の充実】

近年の高度情報化社会の進展に伴って、インターネット上では、SNS (Social Networking Service) や電子メール、動画サイトなど様々なサービスが提供されている。これらは学生にとって大変身近であるが、反面、個人情報流出や誹謗中傷、犯罪に巻き込まれるなどの問題も指摘されている。情報リテラシー実践では、これら問題に対して、情報倫理について第1講と第4講で、幅広く関連する学習をこれまで扱ってきたが、昨今の学生を取り巻く情報環境を勘案して、学習後に情報モラルやルールについて、身に付いたかどうかを測る学習到達度評価を2015年度より、以下の通り実施した。

名称：情リテ情報倫理テスト

対象：第1学年学生全員

実施時期：第4講の情報倫理学習後

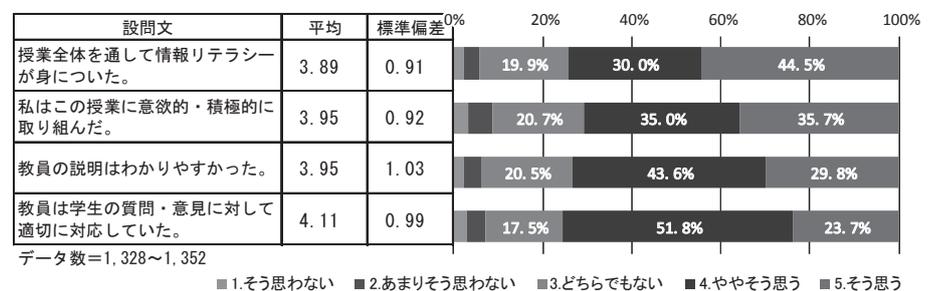
実施時間：第4講の授業時間内または、終了後、1週間以内の授業時間外にて行った

評価：8割正解をもって合格とし、不合格者は到達するまで繰り返し実施した

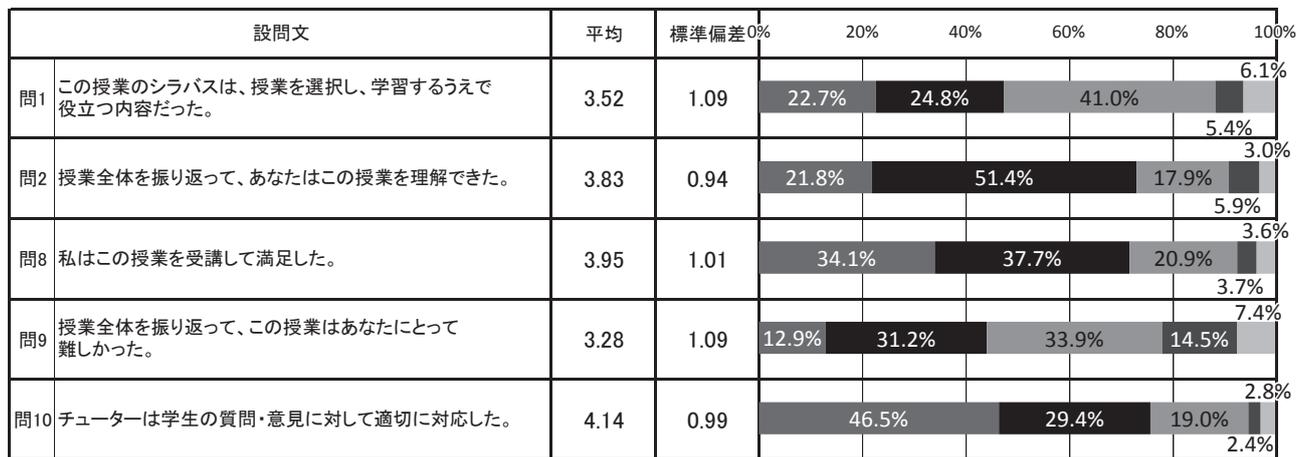
方法：本学eラーニングシステムに用意された学習到達度テストを使用

出題：主に授業で扱う情報倫理講習用スライドの学習内容を具体化した20問からなるテスト

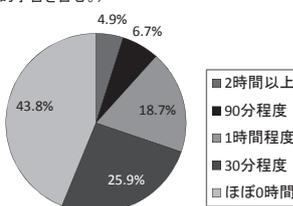
図1：授業評価アンケート（情報教育検討部会版）



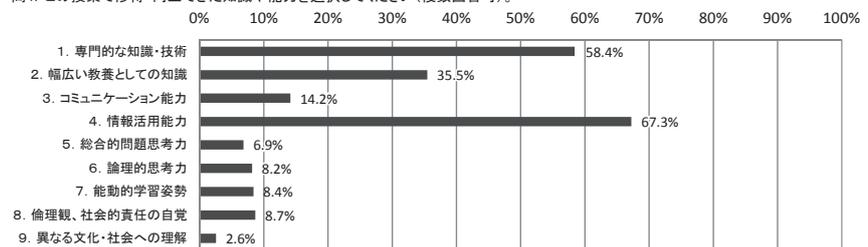
＜実施期間＞ 平成27年7月9日(木)～平成27年7月27日(月)
 ＜履修登録者数＞ 1,671人 ＜回答者数＞ 1,363人 ＜回収率＞ 81.6%
 ＜授業科目数＞ 38クラス ＜実施科目数＞ 37クラス ＜実施率＞ 97.4%



問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。)



問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。



実践英語教育

授業改善アンケート結果の検討とこれからの課題

英語教育分科会座長
都市教養学部人文・社会系教授
辻 麻子

【はじめに】

本学の英語教育は2013年度から新たなカリキュラムを導入し、今年度は3年目に当たる。新カリキュラムでは、従来通り統一教科書を使用するクラス（Bレベル）の他に、新たにAレベル（特に英語の運用能力の高い学生群）とCレベル（英語を初めて学ぶものを含め、特段の配慮が必要と思われる学生群）を設定し、レベル分けに応じた教材及び教育方法を用いてきめ細かい指導を目指している。クラスサイズは、Aレベルは約8名、Cレベルは約10名、Bレベルでも、約20名であり、少人数制となっている。

【個別質問事項について】

統一教科書について 統一教科書として用いた Active Skills for Reading 4 は、大学教養レベルにふさわしい英語読解力を養成し、語彙力を増強するとともに、論理的な思考法を身につけることを目指している。内容は National Geographic 誌の記事を編集したもので、文系理系を問わず大学生の知的好奇心を満足させるべく、歴史や地理はもちろん、宇宙的規模から食生活まで多彩なテーマで人間と世界について深く考えさせることを目的としたテキストである。

問8ではこの教科書の難易度について尋ねている。その結果、「易しい」1.8%、「やや易しい」7.3%、「ちょうど良い」65.3%、「やや難しい」21.3%、「難しい」4.3%であった。6割以上（65.3%）の学生が「難易度は適切である」と評価しており、「(やや) 難しい」は全体のほぼ4分の1（25.6%）である。ちなみに2011年度以降、教科書を「(やや) 難しい」とした学生は、22.4%、4.9%、42.1%、50.6%、25.6%と推移してきている。また、5段階評価（5: 易しい、1: 難しい）の平均値は、2008年度以降、2.78、3.28、3.14、2.93、3.53、2.55、2.44、2.81と推移している。教科書を「(やや) 難しい」と評価した学生の割合からも

5段階評価の平均点からも、今年度の教科書は昨年度に比して難易度は下回り、2008年度以降の平均値に近い比較的広範囲の能力の学生に受け入れられたものと考えられる。ただし2013年度より新しいカリキュラムとなり、Aレベル及びCレベルの学生は統一教科書を使用しておらず、2013年度以前と直接比較できない。統一教科書の難易度については毎年慎重に検討しており、このアンケート結果を踏まえ次年度以降の教科書選定をする必要がある。

学生の関心 問9では「授業の中で一番関心をもって取り組むことができたのは何か」を尋ねている。結果は、「内容理解」44.2%、「英文和訳」24.9%、「語彙学習」16.0%、「構文理解」11.7%であった。昨年度の結果は、それぞれ47.2%、28.0%、13.5%、9.6%であり、例年と順位はさほど変化はないが、語彙力の充実への関心が高まったことは新しい傾向と捉えることができよう。

今後の学習との関わり 問10では「この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか」と尋ねている。「そう思う」が21.2%「ややそう思う」が43.1%で、これらを合わせると64.3%となっている。5段階評価（5: そう思う、1: そう思わない）の平均値は、2008年以降今年度まで、3.19、3.14、3.28、3.41、3.31、3.68、3.71、3.66とおおむね上昇傾向で推移しており、今年度は前年度よりやや低いものの、英語教員が一丸となって、学生のニーズをくみ上げてきた結果を十分反映したものと言える。

【共通の質問事項について】

シラバスについて 問1では「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習する上で役立つ内容だったか」を尋ねている。結果は、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせて41.3%であり、「どちらでもない」も合わせれば84.0%にのぼり、おおむね好意的な評価を得ていると言える。ただし実践英語Iは必修科目であるの

で、他の科目群と共通の質問項目では、適切な答えが得られないのかもしれない。

授業の理解度 問2ではこの授業の理解度を尋ねている。結果としては、「そう思う」「ややそう思う」を合わせると73.0%（昨年度69.1%）となっており、大半の学生が授業を理解している。一方で、4分の1弱の学生が十分な理解を得られていない点も踏まえて、さらに多くの学生が英語力を身につけ、授業を理解できるようにする工夫をする必要がある。

学習時間 問3では一週間の平均的な授業外学習時間を尋ねている。「1時間程度」以下との回答が2011年度以降、84%、87%、79.7%、81.4%と推移し、今年度は85.2%となった。「90分程度」以上は14.8%である。また「ほぼ0時間」という学生が19.5%（昨年度15.7%）もいる。これは教科書の難易度と必ずしも相関せず、学生の総体的資質に寄るものとも思えるが、なんとかして、教室外学習を促し、英語力の向上を図りたい。そのための教員の側の工夫が求められている。

授業で得られるもの 問4では「この授業で修得・向上できた知識や能力」を複数回答可で選択させている。「幅広い教養としての知識」47.7%「異なる文化・社会

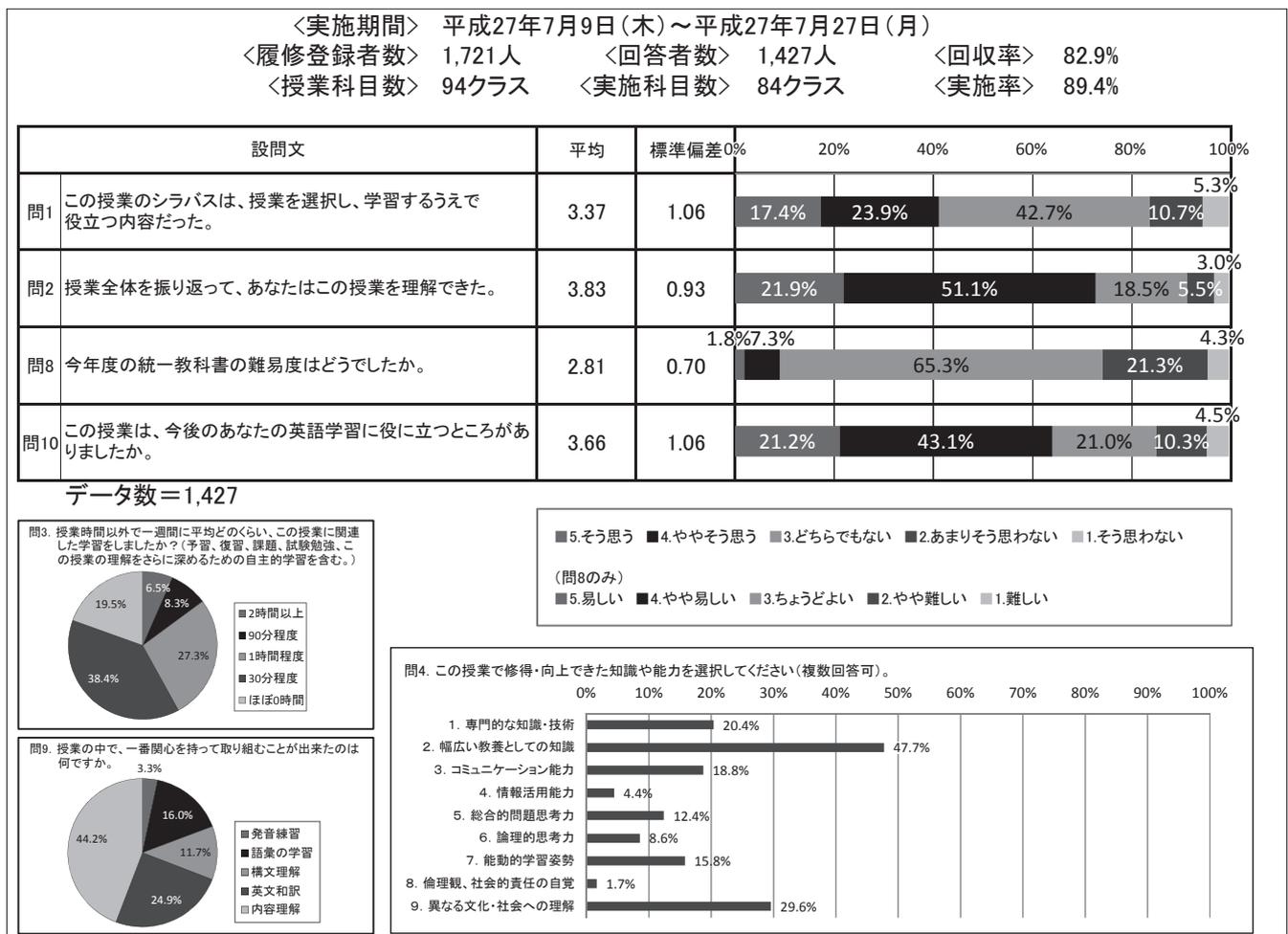
への理解」29.6%に次いで「専門的な知識・技術」も20.4%と多くの回答を得た。これは、実践英語科目のシラバスに掲げられている目標の一つである「言語の背景にある文化・歴史・倫理などを深く理解し、知的視野を拓げる」ことがある程度達成され、高度な学問探求の道への布石となったと言える。

【今後の課題と展望】

新たなカリキュラムによる授業の開始後、3回目となる授業改善アンケートは、昨年度とほぼ同じ傾向と言える。しかしわずかながらとはいえ、確実に教員の工夫の効果が表れているといえるだろう。

習熟度別クラス編成テストがTOEICによって行われるため、「実力をより客観的に把握できる」点を評価する学生が多いようだ。また、期末試験としての統一試験廃止により、各教員がそれぞれのクラスに合わせて柔軟に授業が運用できたことの達成感もあるとも聞いている。

今後は新たなカリキュラムをさらによりよいものにし、充実した授業を行うことが必須である。特に、統一教科書の難易度と内容を精査し、授業の理解度を上げ、授業外の学習をさらに促す工夫が喫緊の課題である。



未修言語の授業改善アンケートについて

未修言語科目部会長
都市教養学部人文・社会系教授
佐々木 睦

【はじめに】

本学では、大学入学後に基礎から学ぶ言語科目のことを、「未修言語科目」と呼称しており、「第二群」（ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語）、「第三群」（ロシア語、スペイン語、イタリア語、ギリシャ語、ラテン語）の二つの科目群から構成される。本学では多くの学科が第二群の科目を必修科目、あるいは推奨科目に指定している。未修言語は人文・社会系の担当教室のコーディネーターと、未修言語部会場の場を中心とした各言語担当教室の情報交換により、授業の健全な運営と不断の改革が行われてきた。授業（特に初級）の設定する目標は、大学入学後に初めて学ぶ外国語ということを鑑みて以下の二点に集約されよう。

- ①発音、文法、基本語彙など未修言語の基礎の習得。
- ②異文化に触れ国際的な視野を育むきっかけを持つ。

また近年の傾向として、本学では外国語の資格取得を目指す学生が増加していること、本学と世界各地の大学との国際交流提携が推進されていることが挙げられ、さらに2020年の東京オリンピックの開催を間近にひかえた今日、未修言語教育はますます重要となりつつある。

【個別の質問項目】

問8については、教員側が想定している授業レベルと受講者側の要求レベルのマッチング、また言語によって導入されている統一教科書の難易度の妥当性を確認するために設けた。問9は海外留学などを視野に入れ、学習を続けていくモチベーションを喚起するための契機となったかどうかを確認するための設問である。

問8での「教科書の難易度」については、「ちょうどよい」が66.5%にのぼり、大方の授業において、妥当な教材選択および難易度設定が行われたことを示している。前年度調査の63.7%からもわずかだが増加している。参考までに中国語では前年度までのアンケートの結果を受け、難度をやや平易にした統一教科書の改

訂版を出版し、学生の要求と能力へのマッチングを目指した。ただし、前述のように統一教科書の採用は言語により異なり、問10の結果とつき合わせた分析が必要である。

問9では「強くそう思う」「そう思う」が計74.9%という高い水準に達している。前年度の68.9%から7ポイント上昇した大きな要因は「強くそう思う」の割合が前年度の22.6%から27.6%に上昇していることであり、海外留学、資格取得に対するモチベーションの高まりの反映ではないかと推測される。

問10は、各項目がどの言語科目に対する回答なのかを把握し、より正確な実態調査を行うために今年度から追加された項目である。

【共通の質問項目】

問1で問われた「シラバスの有用性」について、「そう思う」「ややそう思う」が計56.2%と昨年度の46.1%から10ポイント以上の増加を見せたこと、「あまり思わない」「そう思わない」が昨年度の計14.8%から10.6%へと減少したことは、一定の評価が与えられる。一方「どちらでもない」が33.2%（前年度39%）と高い数値にとどまっていることは、シラバスの書き方に依然工夫の余地があることを裏づける。問2の授業理解に関する質問に関しては、「そう思う」「ややそう思う」が計70.6%と前年度の67.4%から3.2ポイント上昇し、授業、教科書の難易度が学生の要求や能力に近づいたことが裏付けられる。

問3での、授業以外での学習時間が、90分程度以上の割合が計10.5%と、前年度の7.6%から若干の改善を見せたが、週1時間程度以下の割合が依然89.5%（前年度92.3%）と高い数値を示し、学習指導上の課題を露呈する。未修言語を習得するためには、予習や復習、実践が必須だが、この結果は大多数の受講者は授業外ではほとんどその機会を持たないことを示している。

問4での、授業を通して得られた知識・能力として、

「専門的な知識・技術」「幅広い教養としての知識」「異なる文化・社会への理解」がいずれも高い数値を示しており、未修言語科目の教育目的はおおむね達成されていると評価できよう。一方、異言語学習の向上に必要な不可欠な「コミュニケーション能力」は前年度の29.3%から35.3%へと若干の伸びを見せているが依然改善の余地があり、指導の際の更なる工夫が求められる。

【全体的な傾向と今後の課題】

集計結果からは、全体として難易度的に適切な授業が行われており、受講者も授業を理解しているという傾向がうかがえる。それぞれの項目で前年度調査よりさらにポイントがアップしていることは、授業の改善が行なわれたことの他に、資格取得、海外留学へのモチベーションの高まりとも関係がありそうだ。

ただし前年度からの課題、すなわち「自発的な学習意欲の低さと、それを向上させることができていないという現状」(『クロスロード』Vol.14)は持ち越しとなった。

報告者個人の経験だが、ここ数年の傾向として、予習の仕方が分からないという学生からの声が多く寄せ

られる。この対策として、予習の仕方を授業内で指導するというアナログな方法をとることも必要であろうし、一方で民間業者が開発販売をしているパソコンを使用した自学学習システムの採用というデジタルな方法も必要であろう。後者については中国語の一部の授業で2015年度から導入しており、学生の利用状況を見て随時拡大予定である。

なお2015年度末に行なわれるアンケートから、「はじめに」で述べた未修言語教育の二つの目標に対応する二つの質問を新しく設定することになっている。この質問は、学生の未修言語に対する満足度や要求、異文化理解の程度を反映するもので、今後の授業改善に大きな役割を果たしてくれるであろう。新設項目を以下に掲示して、この報告の結びとしたい。

新設問1「授業の中で、一番役に立つと感じたのは何ですか」

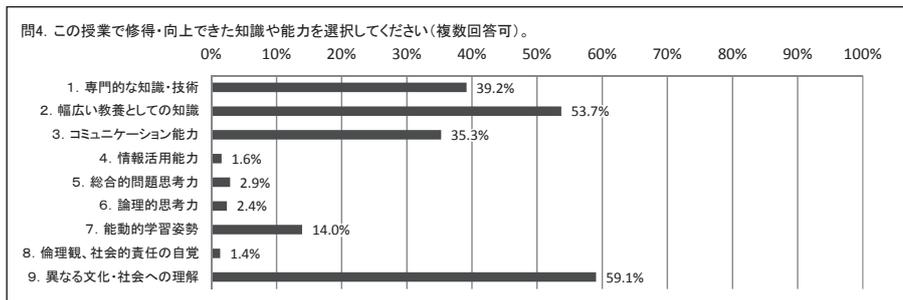
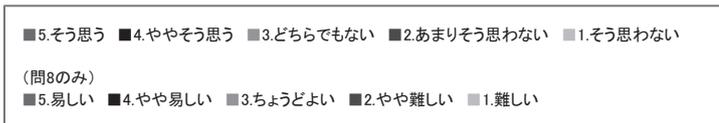
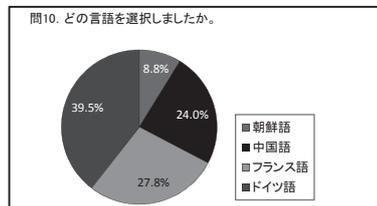
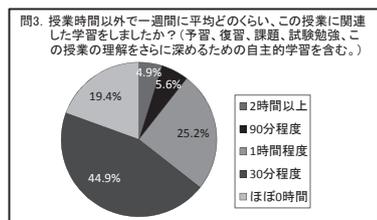
(1. 文法説明 2. 発音練習 3. 語彙の学習 4. 外国語作文 5. 和訳)

新設問2「この授業はあなたの異文化理解のきっかけとなりましたか」

〈実施期間〉 平成27年1月8日(木)～平成27年1月26日(月)
 〈履修登録者数〉 1,951人 〈回答者数〉 1,426人 〈回収率〉 73.1%
 〈授業科目数〉 107クラス 〈実施科目数〉 93クラス 〈実施率〉 86.9%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.67	1.02		24.3%	31.9%	33.2%	7.6%	3.0%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.77	0.96		20.9%	49.7%	17.6%	9.6%	2.2%
問8 今年度の教科書の難易度はどうでしたか。	2.69	0.71	0.9%		66.5%	20.8%	7.8%	3.9%
問9 この授業は、今後のあなたの言語学習に資するところがあった。	3.92	0.95		27.6%	47.3%	17.5%	4.6%	3.1%

データ数=1,426



理系共通基礎科目の授業改善アンケート結果と FDの取組について

理工学系 FD 委員会委員長
都市教養学部理工学系生命科学コース教授
川原 裕之

【理系共通基礎科目の目的・目標】

理系共通基礎科目は、数理科学関係、物理学関係、化学関係、生命科学関係、電気電子工学関係、機械工学関係の6分野から、全学部学生を対象に、一般教養の自然科学系の授業として開講されている。理系共通基礎科目として2015年度前期に開講された科目は、微分積分I、線形代数I、微分積分III、線形代数III、解析入門I、離散数学入門、基礎微分積分B、基礎線形代数A、教養基礎物理I、初等物理I、専門基礎物理I、物理学概説I、物理通論I、化学概説I、一般化学I、一般生物学I、生物学概説IA、工学系電磁気学、工学系電気回路、電気数学、材料の力学第二B、工業の力学B、機械の力学Bであり、これらが今回のアンケートの対象となっている。

【理系共通基礎科目独自の質問の選定と評価結果】

科目群独自の質問として、受講者数、授業環境、授業テーマに関する以下の3項目を選定し、65の授業科目4,762人の受講者のうち、63科目3,545人から回答がよせられた。回収率が前年の66.9%から74.4%に大きく上昇したことが本年の特徴の一つである。

問8 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか。

問9 快適な環境下でこの授業を受けることができた。

問10 この授業テーマは自分の関心にあっていた。

問8のクラスの人数については、「ちょうどよかった」という意見が最も多いが、前年67.6%から65.4%へ若干の減少、対して「やや多かった」と「多かった」という意見が前年30.3%から32.4%へ増加した。一方、問9の授業環境については、「快適」あるいは「特に問題がない」と感じた学生が前年71.4%から75.0%と改善し、空調関係などへの配慮が評価されているように感じた。問10の授業テーマに対する関心については、自分の関心に「合わない」と回答した

割合は7.6%と極めて低率で、シラバスの改善や各教員の授業への工夫が数字にも反映されてきているように思われる。

【共通の質問項目の評価結果】

共通の質問項目は以下のように設定されている。

問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。

問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。

問3 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか。

問4 この授業で修得・向上できた知識や能力を選択して下さい。

問1のシラバスについては、およそ半数(44.6%)の学生が授業の選択や学習に役立ったようだ。問2の理解度については、「理解できた」学生が45.2%いる一方で、理解できたとは「いけない」と回答した学生も25.3%おり、二極化の傾向は改善されていない。問3の学習時間については、一週間に「30分程度から1時間程度」の学生がもっとも多く、全体の61.0%(前年63.1%)を占めていた。およそ4人に1人はまったく授業時間外に学習していない点は前年と変わっていない。問4の修得技能については、「専門的な知識や技術」、あるいは「理論的思考力」の項目が「教養としての知識」よりも多くなっているが、これは理系基礎科目としての特徴と考えられる。

【集計結果の経年変化に関する所見】

理系共通基礎科目では、問1、問2の平均値はいずれも3.5弱であり、データのある2013年前期からほとんど変動がない。独自質問である問9の授業環境については、例年、前期が低く、後期が高い周期的変動が見られるが、今年度前期を過去の前期の平均値と比

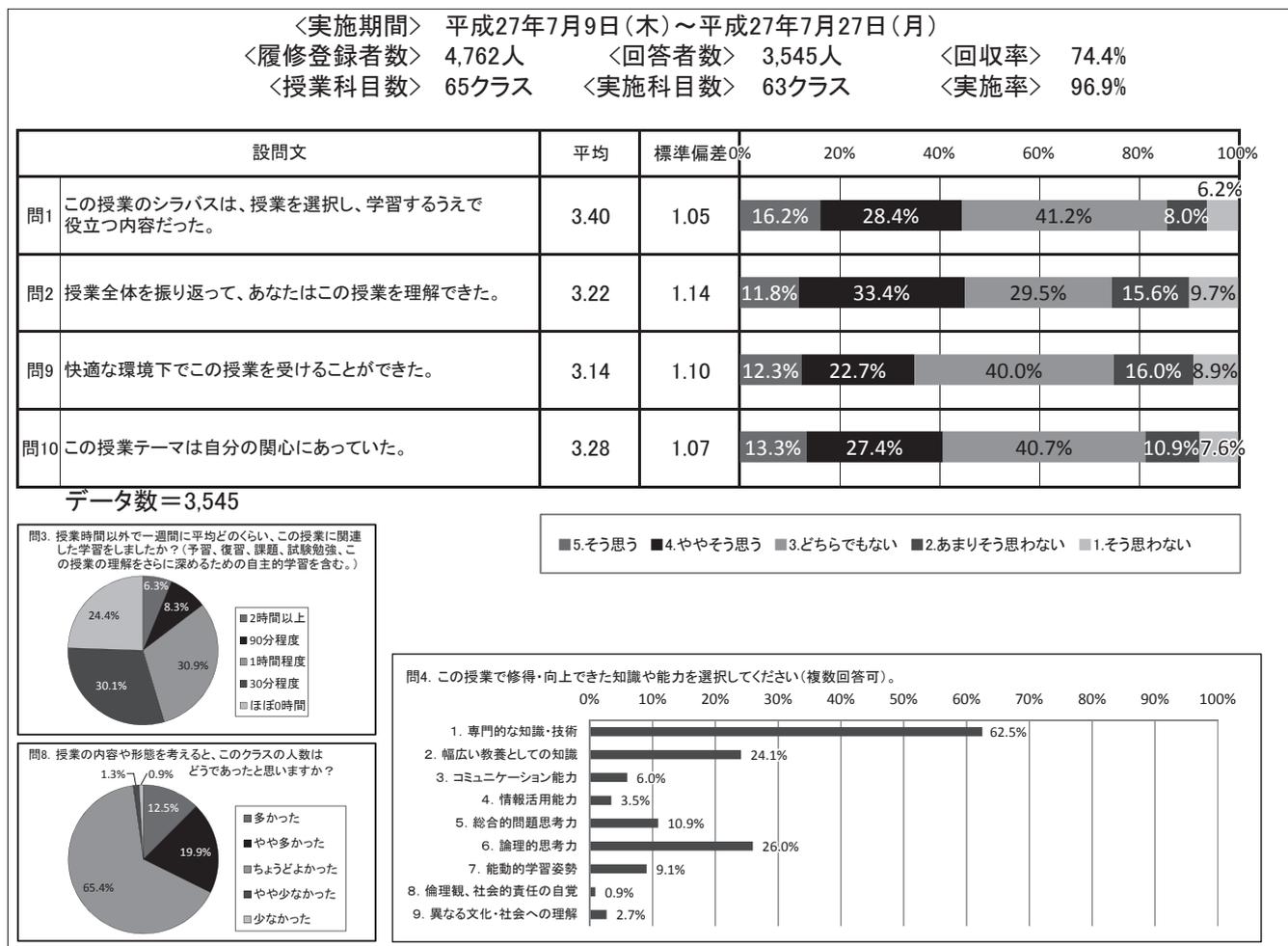
較すると、ほぼ一定の水準を保ち続けていることがわかる。ちなみに2010年前期の平均値2.99、並びに昨年度前期の平均値はいずれも3.00、今年度前期は3.14であった。問10の授業テーマへの関心については、平均値が2008年に3.15、2009年に3.18、2010年に3.17、2011年に3.24、2012年に3.24、2013年度に3.32、2013年度に3.33、そして今回が3.28と、わずかな差ではあるが緩やかな改善傾向が認められ、学生の関心をひく授業・適切なシラバス提供によるマッチングの改善などが行われるようになってきた結果と推測される。

【今後の改善に向けた課題】

これまでのFD委員会の取組、各授業担当教員の講義展開・シラバスへの工夫などの努力などから、授業そのものへの満足度が漸増の傾向にあることは喜ばしいことである。このような授業改善アンケート結果のフィードバックがこのような数値改善の基盤になっていることは十分に考えられ、本FD活動の重要性が示唆される。問5では、授業の良かった点（とくに教員の工夫など）が指摘できるようになり、問6では、逆

に改善点を指摘し、具体的な改善策を提案することもできるようになっている。アンケートの「教室などの設備に対する要望」自由記述欄では、教室の空調を中心とした不満、要望がこれまで多数寄せられていたが、これらの結果を把握いただいた大学側の配慮と努力により、今年度の授業環境への評価が改善される様子も認められた。今後も継続したご配慮を関係の方々にお願したい。

一方、クラスの人数については、「多かった」という意見が徐々に増加し、32.4%に達している点は、若干心配なポイントである（ちなみに「少人数教育を受けた」と答えた割合は、2.2%と極く僅かであった）。学生自身がクラスサイズを「多すぎる」「大きすぎる」と感じる環境では、教員とのコミュニケーションやきめ細かい指導が行き届きにくくなる可能性も否定できないからである。アクティブ・ラーニングを取り入れた教育が推奨されつつある中、適切なクラスサイズが提供されているかどうかを、学生・教員双方からのアンケート結果を活用しつつ、今後、注視していく必要があるように思われる。



教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて

教養・基盤科目群検討部会長
都市教養学部理工学系機械工学コース准教授
小口 俊樹

【はじめに】

全学共通科目の再体系化により、以前の都市教養プログラムは、2013年度から教養科目群・基盤科目群に分類されました。教養科目群は、「都市・社会・環境」「文化・芸術・歴史」「生命・人間・健康」「科学・技術・産業」の4つのテーマを通じた知識修得から、社会人として必要な幅広い教養を身につけ、総合的な思考力や問題解決能力の育成を目指しています。基盤科目群は、「人文科学領域」「社会科学領域」「自然科学領域」「健康科学領域」の領域の学問形成に不可欠な基礎的・導入的な知識や能力の修得により、各専門分野の学修に備える、あるいは専門とは異なる分野・領域についての知識やものの考え方の学びを通して、多角的な視野を持つことを目指しています。ここでは、教養科目群、基盤科目群の2015年度前期開講科目に対して実施した授業改善アンケートの結果について、その概要を報告します。

【アンケート実施状況について】

アンケートは、2015年度前期に開講された93クラス中、80クラスで実施され、履修登録者数11,625人中、6,203人から回答を得ており、回収率53.4%でした。過去2年間の同時期の調査と比較すると、2013年度96クラス中80クラスで実施、履修登録者数13,954人中、回答6,445人(回収率46.2%)、2014年度92クラス中79クラスで実施、履修登録者数13,254人中、回答7,049人(回収率53.2%)でしたので、昨年度と同程度の回収率であり、実施科目数も3年間ほぼ同じでした。

【質問項目とその評価結果及び所見】

教養・基盤科目群では、共通質問項目に加え、独自に次の3問を設けています。

問8 授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？

問9 この授業を受講したことによって、自分の視野が広がったと思いますか？

問10 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人

数はどうであったと思いますか？

以下では、問1から問4の共通質問項目と上の個別質問項目問8から問10への回答結果の動向について検討したいと思います。

まず共通項目の問1「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習する上で役立つ内容だった」というシラバスの有用性への質問の回答平均は3.68であり、「そう思う」「ややそう思う」と有用性を認める学生が59.3%です。昨年度は回答平均3.69、有用性を認める学生が60.4%であり、ほぼ横ばいです。逆に、「そう思わない」「あまりそう思わない」と有用性を感じない学生は、この2年間僅かではあるが減少傾向にあります。教養・基盤科目は新入生が多く受講する科目でもあることから、講義選択の道標として学生自ら活用できるよう、一層改善を心がけていく必要があります。

次に、問2「授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた」と理解度を尋ねた質問と、問8の授業の難易度の問いに対する回答結果を見てみます。問2の回答平均は3.53（'14年3.57、'13年3.52）、問8の回答平均は2.64（'14年2.64、'13年2.66）であり、前後期含めてもいずれもほぼ横ばいです。問2の理解度について、「そう思う」「ややそう思う」をあわせて57.5%（'14年60.1%、'13年58.5%）であり、減少したものの、6割弱の学生が理解できたと認識しています。一方、「あまりそう思わない」「そう思わない」と否定的な学生は15.0%と減少傾向にあります。

問8の難易度についての結果は、おおむね過去2回と同じであり、「ちょうどよかった」の比率が59.8%（'14年59.0%、'13年59.3%）であり、「やや易しかった」3.8%（'14年4.3%、'13年4.7%）と「やや難しかった」27.0%（'14年25.2%、'13年25.5%）を加えると9割を超え（'14年88.5%、'13年89.5%）、教養・基盤科目群としては適切な難易度であったといえます。

問2と問8から理解度と難易度のギャップについては、授業の難易度が「ちょうどよかった」「やや易しかった」「易しかった」の合計が65.2%（'14年65.4%、

'13年 65.8%) であるのに対し、理解できたと認識している学生が前述の通り 57.5% であり、その差は 7.7% ('14年 5.3%、'13年 7.3%) となっています。この要因としては、理解度に対して「どちらでもない」と回答した学生が 27.4% あり、自分の理解度について明確な判断ができずにいると見ることもできます。

問3は「授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか?」という授業外を含む学習時間の確保に関する問いですが、「ほぼ0時間」と回答した学生の割合は、減少傾向にありながら 51.9% (14年 53.1%、13年 58.1%) と5割以上を占め、「30分程度」を含めると 80.6% ('14年 80.8%、'13年 83.8%) と8割以上を占めます。

共通項目問4「この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください」では、「幅広い教養としての知識」60.9% ('14年 62.8%、'13年 64.4%)、「専門的な知識・技術」43.1% ('14年 45.5%、'13年 42.6%) がそれぞれ1、2位となり、教養・基盤科目としての趣旨に沿った科目が提供されていることを示しています。

また、授業により視野が広がったと思うか? という問9では、66.0%の学生が「そう思う」または「ややそう思う」と回答しており、回答平均も 3.75 でほぼ例

年と同程度の結果でした。

受講人数についての問10への回答結果では「ちょうどよかった」が 69.7% と向上し ('14年 57.5%)、「多かった」8.2% ('14年 15.9%)、「やや多かった」17.9% ('14年 23.2%) であり、一クラスの受講者数を多いと感じている学生 26.1% ('14年 39.1%) と減少しています。これは、本年度から、前年度に履修者数が 400 名を超えた授業については、翌年度より履修者数の上限を設定することにし、実際に 6 科目 (前期 5 科目) に上限が設定されたことによると考えられます。

【今後の課題とまとめ】

共通項目問3の回答結果から、授業科目に対する授業時間以外の学習時間は、受講生の8割以上が30分程度以下でした。このことは、学生本人が、自身の理解度が把握できていないことと関係していると思われます。授業外学習は自分の理解を見直す上でも重要であり、学習時間の確保は、おそらく本科目群に限らない問題と思われますが、演習課題だけでなく、授業での理解をさらに深めるための自主学習へと学びを深化させるには、大学教育の導入部ともいえる本科目群でも方策を講じる必要があるように思います。

